ごいた入門

＝改訂版＝

伝承娯楽「能登ごいた」保存会

はじめに

＊＊ 歓迎「ごいた」入門 ＊＊

「ごいた」は石川県能登町の、宇出津地区に伝えられてきた独特の伝承娯楽です。「ごいた」の古里「能登町」について少し紹介しましょう。

能登町は、能登半島の富山湾に面した地域に位置し、古くから漁業が盛んで定置網漁業をはじめ、イカ釣りなどの遠洋漁業の基地も擁しています。

縄文時代前期初頭から約４千年間も人々が住みついて、イルカ漁などのダイナミックな漁撈活動をしていたことで知られる、国指定史跡「真脇遺跡」や、古代の製塩遺跡が立地しています。

一方、後背地には低級な丘陵が広がっており、用材や山菜・キノコなどの林産物を産出し、あちこちに散在する水田や畑からは、おいしい米や野菜が収穫されます。

また、能登は祭りの国ともいわれ、ここ能登町には石川県指定の民俗文化財などが数多くあります。なかでも、祭祀遺跡「石仏山」の荘厳な祭りや、中世の宮座制を残しユーモアあふれる掛け合いで知られる「鵜川のいどり祭り」、あばれ祭りとも呼ばれる勇壮豪快な「宇出津のキリコ祭り」、豊漁を祈ってのぼり旗を立てた舟が港いっぱいに展開する「小木のとも旗祭り」などは、訪れた旅人の魂をきっと魅了してくれるでしょう。

また、奥能登一帯の農家で行われている国指定無形民俗文化財「あえのこと」は、豊作を約束する田の神様に対して、心のこもったもてなしを行う民間信仰習俗です。「能登はやさしや土までも」といわれるように、客人を優しく遇する能登の人々の心情を投影していると見てよいでしょう。

味わい深い山海の食材に囲まれ、明媚な風光と伝統ある行事が育てた、温かい人情に満ちた町がわが能登町です。

そんな能登で「ごいた」が生まれたのは、偶然なのでしょうか。

「ごいた」は、能登で生まれるべくして誕生したと思われます。

「ごいた入門」を手にされた皆様には、「ごいた」を打ち興じながら、わが町の良さに触れていただきたいと願ってやみません。

ごいた入門 ＝改訂版＝

目　次

はじめに　＊＊ 歓迎「ごいた」入門 ＊＊

第１章 「ごいた」の誕生。そして普及へ！――――――――P1
1．「ごいた」誕生
2．「ごいた」の駒
3．「ごいた」の普及

第２章 「ごいた」の競技方法――――――――――――――P4
1．「ごいた」の競技方法
2．駒の枚数・上がり点と駒の特徴
3．こんな場合の上がりの点数
4．競技の常識？

第３章　実践例から学ぶ「ごいた」競技――――――――――P9
1．同じ配駒でも駆け引きで異なる競技
2．はりま王に勝てた！
3．「ごいた」にも定石はある
4．「ごいた」は手が７割、８割！　手を持つのも実力のうち！

第４章　伝承娯楽「能登ごいた」保存会――――――――――P15
1．保存会の誕生
2．保存会の活動
3．「ごいた」番付の発行

第５章　これからの「ごいた」――――――――――――――P18
1．仲間の輪を広めよう
2．世界へ羽ばたく「ごいた」
3．公認された「ごいた」

═ 第１章 ═

「ごいた」の誕生。そして普及へ!

１.「ごいた」誕生

「ごいた」は、漁師町である奥能登の宇出津で発明、そして興じられている娯楽である。近年では「ごいた」の遊び方が、インターネットを通して幅広い人たちに知られるようになり、各地に広がりをみせてきている。

さて「ごいた」という娯楽を､いったいだれが考案したのかということであるが、言い伝えや古老の話によると､布浦清右エ門と三右衛門という２人の名前があがり、「ごいた」の発明・普及には、この２人の人物の説がある。

布浦清右エ門については、天保４年(1833)７月生まれで、嘉永５年(1852)１月、18 歳で布浦家を「絶家再家」の記録が残っている。また、62 歳となった明治 28 年(1895)12月に、家督を養子の庄太郎に譲り、自身は隠居している。そして清右エ門は、大正 13 年 10 月に没するまで、なんと 91 年もの長き生涯をおくったのであった。

清右エ門は、集魚灯を考案したり、能登で初めて造花技術(葬儀に使う花輪など)をもたらすほどの発明家であったという。そのうえ絵や書をよくたしなみ、加えて無類の将棋好きで、この遊びを考えて広めたのではないかと思われている。家業のため各地を行脚しながら、その土地の風土や娯楽なども見てきたのかもしれない。隠居するまでは家業に専念し、その後は「ごいた」の発明と普及に時を過ごしたと考えても不思議ではないだろう。布浦清右エ門の末裔である布浦和彦氏はその四代目にあたり、現在は能登町宇出津新町で代々の家業（百貨店）を営んでおられる。

一方の三右衛門については、宇出津の棚木に住んでいたといい、勝負事には大変研究熱心な遊び人だったということしかわからない。

清右エ門と時同じくして三右衛門という気のあった相棒がいたので、この２人によって誕生したと考えてよいだろう。

２.「ごいた」の駒

「ごいた」は将棋に似た駒を使い、王（玉）・飛・角が各２枚、金・銀・馬・香が各４枚、歩（し）が 10 枚で、みな同じ大きさと形で、計 32 枚の駒を使う。

すなわち将棋より歩の数が８枚少なく、また将棋と異なって駒の裏面は無地となっており、麻雀牌のように裏から見ると大きさも形も同じで、全く区別がつかないようになっている。ここで歩がなぜ「し」と彫られているかというと、駒を作る際、画数の多い「歩」を彫る労力を省いて、「と」金の「と」を彫っていたものが、やがて「し」になったものと考えられている。

駒は、丈夫で肉厚もある真竹から作られるものが主流となっている。駒作りは、かつては遊ぶ人のほとんどが自ら製作したものであったが、今は駒を作れる人は少数となった。１組の駒を製作するのに慣れた人でも早くて１週間はかかり、根気と器用さが要求されるのである。

「ごいた」に興じるには盤を使用するが､打ったときの音が醍醐味の一つといえる。盤には縦横の条線の必要がなく、「パチリ」といい音が出るような盤や板であればよいが、多くは将棋盤や碁盤を使用している。

「ごいた」の対戦中、熱が入ってくるここ一番ともなると、つい駒を割らんばかりに強く打つ場面が見られる。そんな時でも竹製の駒はびくともしないのである。先人たちが永年「ごいた」に興じていて、行き着いたのが竹製の「ごいた」だったのであろう。

丈夫で汚れが付きにくく、そして、手中に納まる手頃な大きさになったのも、みな先人の知恵からの賜物であろう。

ごいたの駒（32 枚）

3．「ごいた」の普及

終戦後、安宅健次（故人）という人が、この娯楽の名に「娯慰多」の三字を当て、紙で前述のような駒を作り、ごいたの全国普及を図ったことがあったが、成功せずに終わったと聞いている。また、町内のとある商店でも、将棋の本場である山形県天童の木製将棋駒の加工途中の物に手を加え、製作し販売したことがあったが、竹製に親しんできた地元では受け入れがたいものであったので、もっぱら普及用に使われた。

さて、昭和 52 年以来、能都町立中央公民館 (現能登町立宇出津公民館) が、この伝統ある娯楽の保存と、一般の青壮年層への普及を図ることを目的に、毎年正月に新春ごいた大会を開催している。「ごいた」が大会という形で行事化されたのは、おそらくこの大会からであろう。

「ごいた」はもともと、短時間で勝負が決まることから、大敷網漁を終えた余暇の時間を利用するなど、漁師の間で多く興じられており、また、夏場の漁番屋、御旅所、網干場など、浜辺や日陰の風通しの良い場所に、ゴザやムシロを敷いて楽しんでいる姿がよく見られたものである。これは、まさにこの土地だけに見られる夏の風物詩、宇出津の風物詩である。興じる人、後ろから眺めて講釈を述べる人、とにかく賑やかな場面を想像していただきたい。

ところが、「ごいた」を興じる人が年々減少し、路地裏などで見かけることも少なくなっていく状況を憂えて、平成 11 年 5 月「ごいた」の普及と伝承に寄与することを目的に、伝承娯楽「ごいた」保存会が設立された。

═ 第２章 ═

「ごいた」の競技方法

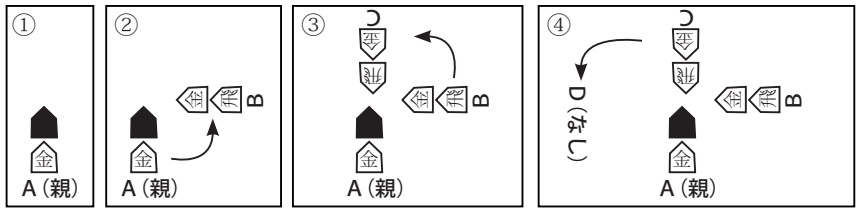
1．「ごいた」の競技方法

競技は２人１組となり４人で行う。組の構成は、あらかじめ駒を４枚（同じ位の駒２枚を２種）裏にして、４人がそれぞれ駒を取り、同じ位の駒を取った者同士が同じ組となり、勝負が決まるまでこの組み合わせは変わらない。同じ組の者は向かい合って座る。また、両組のうち位の高い方の駒を取った組から親を選出することになる。駒はかき混ぜた後、裏返して盤上に丸く輪を書いたように並べ、親は駒が見えないように上を向き（これを「あごのく」という）、親でない方の組の一人が任意の駒を押さえ、親が「それ」とか「１つ前」と言って、最初に取る駒を決める。

親から順番に左回り（反時計回り）に一枚ずつ取っていく。８枚の駒は、丁度手のひらに納まり、他の人に見えないように打ち出して競技が始まる。

４人（順にＡ・Ｂ・Ｃ・Ｄ）の競技者において、ＡとＣ、ＢとＤが組となり、競技を行っていく。

親から打ち出して、その駒から「しりとり」方式で行う。１回に出す駒は２枚であるので、自分が４回出すことができれば「上がり」となる。親（Ａ）には最初に出す駒を伏せて出す権利が与えられている。すなわち伏せた駒が何であるかは親しかわからないことになる。例えば１枚目が伏せ駒で、２枚目に「金」を出したとする。すると次の人（Ｂ）は、「金」があれば「金」を出して受けて、２枚目には自分が得手とする駒を出していく。同じように、次の人（Ｃ）は、手にそれがなければ「なし」と言い、また、あっても「なし」といって相手組と駆け引きを行うこともある。手の内の駒が、６枚、４枚、２枚と少なくなればなるほどに、受けられる駒の種類も減っていくということになる。



自分の手の内に同じ種類の駒があるからといって、何でもかんでも受けていっても勝利に結びつくことはほとんどないと言ってよい。「ごいた」は、駒の種類によって数が２枚のもの、４枚のもの、「歩」にあっては 10 枚ある。例えば味方同志で４枚ものを３枚もしくは４枚全てをもっていれば、断然有利な戦いができることになる。これが「ごいた」の戦い方の基本的な考えである。

すなわち確率論にたよる面もあるのだ。他の３人がどのような駒を持っているのかを、単なる想像ではなく、確率の裏付けをもって、また、伏せ駒が何であるかも予想しながら展開していくのである。

後述の第３章の実践例を参考にこのあたりの読みとりなどを学んでほしい。

また、駒には次のような性質がある。

●飛・角・金・銀・馬は王で切る（競技用語）ことができる。すなわち、王は　飛角金銀馬の代わりができるということ。

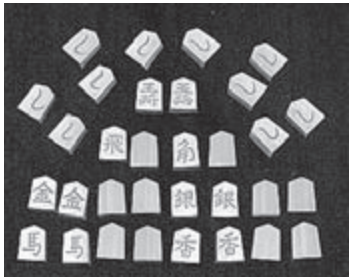
●王は切るときに使用する。ただし、場に王が１枚出ている場合、又は、２枚の王とも自分が持っている場合はその限りではない。

●香・歩（し）は王で切ることができない。

親の第一打と、自分の出した駒をだれも受けることなく一巡してきた場合は、一枚目を伏せることができ、伏せる駒は、概ね位の低い駒（自分にとって不要な駒）が多くなる。

こうして８枚の駒を早く打ち出した方の組が勝ちで、「上がり」の駒（８枚目に出した駒）によって点数（後に説明）がつけられ、先に満点（その時の取り決めで何点でも。普通 150 点が多い）に達した方の組が勝ちとなる。

同じ持ち駒でも、打つ人の考え一つでどの様にでも打つことができ、どちらかといえば駆け引きが勝負の運・不運を左右し、漁師の娯楽らしい競技である。また組同士で、誤った打ち方や 32 枚の駒の行方を誤って読んだりすると、これまた相棒からの非難をまともに受けることとなる。



「ごいた」は、相棒に叱られて上達するものという格言がまかり通るのも、「ごいた」ならではのものだ。

［ごいた用語の説明］

○**かかる**：自分が持っている駒を、もう一人の味方も持っている場合をいう。

○**相者・相方（あいしゃ・あいかた）**：２人一組の一方の味方をいう。

○**あごのく**：並べた駒を４人が順番に取るが、親が最初に取る駒を指示するときに、敵方がどの駒を指すかわからぬように、上を向くことをいう。

○**切る**：同じ駒がない時に、代わって「王」を出すことをいう。

○**受ける**：他の人の打った駒に応えることをいう。

○**相談**：一方が、歩を５枚手にしたときに、再度駒を取り直すか、このまま進めるか協議をすることをいう。

○**どろ**：勝負の結果、一方が 10 点も取れない場合、すなわち 150 対０の場合をいう。

○**手**：４人が手にした駒。配駒をいう。「ごいた」の勝負は、手が７割か８割で決まるなどともいう。

○**つる**：普通は 150 点で勝となるが、勝利まで残り 10 点のときを言う。「つる」となかなか勝てないなどともいう。

○**だまだま・おのおう**：一人が手にする８枚の駒のうち、「王」を２枚持つことをいう。

○**はりま王**：味方同士が、「王」を一枚ずつもっていることをいう。

○**はっちょうばり**：８枚の手駒が８種類全てある時をいう。親で打ち出すときなど大変悩む場面だ。そんな時は考えず「でか順」と言って、大きい位の駒から出していくこともある。これは敵味方も大上がりを避けるためである。

○**手指し・手さこ**：ほとんど盤上に駒が出尽くし、皆の手の内に残る駒の種類が限られる状態になり、どう打っても次の人かその次の人の上がりが見える状況をいう。

［駒の呼称］（金・銀・飛・角はそのまま）

○**歩・し**（ふ・し・ひょう）
○**香**（ごん・きょす）
○**馬**（ばっこ・うま）
○**王**（おうさま・だま）

２．駒の枚数・上がり点と駒の特徴

前項で「上がり」を説明したが、最後に上がる駒の種類によって上がり点が異なる場合もある。また、王は飛・角・金・銀・馬を切ることができるが、香と歩を切ることはできないことは先にも述べたとおりである。

すなわち、香や歩は、時には驚異な存在にもなるということである。

上がり寸前の人は、２枚の駒を持っているが、王か香か歩で、その結果が大きく変わることを忘れてはならない。というより、ここが「ごいた」の面白いところかもしれない。

・王は、２枚あり、上がり点が 50 点。
・飛は、２枚あり、上がり点が 40 点。王で切ることができる。
・角は、２枚あり、上がり点が 40 点。王で切ることができる。
・金は、４枚あり、上がり点が 30 点。王で切ることができる。
・銀は、４枚あり、上がり点が 30 点。王で切ることができる。
・馬は、４枚あり、上がり点が 20 点。王で切ることができる。
・香は、４枚あり、上がり点が 20 点。王で切れない。
・歩 (し) は、10 枚あり、上がり点が 10 点。王で切れない。

３．こんな場合の上がりの点数

なかなか持てない駒であがったりすると、点数が倍になるなどの特典もある。

○残り２枚（７枚目と８枚目に出す駒）が同じ駒で、だれも受けることなく一巡してきて上がった場合は、その駒の２倍の点数で上がりとなる。
・銀と銀であると、30 点×２で、60 点となる。
・馬と馬であれば、20 点×２で、40 点となる。

○手役:同じ組の者同士が、互いに歩５枚を持った場合は、その時点で勝ちとなる。
・歩８枚を持った場合は、100 点。
・歩７枚を持った場合は、残り駒の２倍の点数。
・歩６枚を持った場合は、残る駒のうち高いほうの点数。
・歩５枚の時は、相棒と相談して、続けるか再度駒を取りなおすかを選択することができる。但しこの場合、続けるか否かのみの発言に留まり、余計な言葉は言ってはならない。

４．競技の常識？

先にもふれたが「ごいた」は、他の３人がどのような駒を持っているのかを、単なる想像ではなく、確率の裏付けをもって、また、伏せ駒が何であるかも予想しながら展開していくのである。よって常識的にやってはいけない打ち方なるものを理解しておくことは重要であると心得る。でないと相棒との呼吸があう筈がないということになる。

●相棒の駒を受ける時は、確実に勝利が見える時または、敵方の上がりを阻止する場合に限られる。
●「歩」が少ない時など、伏せ駒に困る時もある。同じように、敵方が香３枚を持ったような打ち方であれば、できるだけ打たせて伏せさせる。３手まで打たせるのも手である。但し、勝利の見込みがあれば早いうちに受けるも策である。

「ごいた」で受けるということは、他の３人に自分の持っている駒はこうなんだというふうに、教えているということを忘れてはならない。４人がそれぞれ自分の持っている駒と場に出た駒を見ながら、そして伏せられた駒を想像して打っていくのである。すなわち、場に駒が出れば出るほど、他の３人が何を持っているかが見えてくるのである。場数を踏めば踏むほど、それがある程度見えてくるというもの。

但し、熟練してくると、定石の裏をかくこともあるので要注意。

═ 第３章 ═

実践例から学ぶ「ごいた」競技

１．同じ配駒でも駆け引きで異なる競技

４人の配駒が下図の場合でも、２通りの実例を紹介しよう。

打順	打ち手	配　駒
①-⑤-⑨-⑬-⑰	甲組：能登太郎	（王・飛・金・馬・馬・歩・歩・歩）
②-⑥-⑩-⑭-⑱	乙組：石川三郎	（金・金・銀・馬・香・香・歩・歩）
③-⑦-⑪-⑮-⑲	甲組：宇出津次郎	（角・金・銀・馬・香・歩・歩・歩）
④-⑧-⑫-⑯-⑳	乙組：能登四郎	（王・飛・角・銀・銀・香・歩・歩）

［実例Ａ］■は伏せた駒、□は表を見せた駒を表す。

①■歩□馬	②なし	③なし	④なし
⑤■歩□馬	⑥□馬□金	⑦なし	⑧なし
⑨□金□歩	⑩□歩□香	⑪なし	⑫なし
⑬なし	⑭■銀□香	⑮□香□馬	⑯□王□歩
⑰なし	⑱□歩□金		

乙組の石川三郎が金上がり、乙組が 30 点獲得となる。

さて、親の第１打を乙組の石川三郎は受けませんでした。これは、相棒の能登四郎に馬があれば、四郎の手も見られるし、馬は２枚対２枚の保有率で、対戦は５分であるということだが、あいにく持っていなかったので、親に第２打を打たせることとなった。２順目の馬を受け、三郎は手の中の多い駒の内、まずは金を打った。

次郎には金があったが受けなかった。これも、あわよくば太郎に金があれば太郎がテンパイをとれると判断したからである。思惑どおり太郎はテンパイをとったが、この時「歩」を放ってテンパイをとったのが四郎は見逃さなかったのだ。太郎が２枚伏せていて３打目に「歩」を放つということは、もう「歩」はないものと見るのが妥当であろう。一方、三郎も、３打目には「歩」が残るように打って、自分は四郎から「歩」がくることを待ってテンパイを迎え、射止めたのである。甲組の能登太郎は、３手目に金を受けて飛を打っていたなら、乙組の「歩」攻めに遭わず上がりが確保できたであろう。

同じ配駒であっても、次は

［実例Ｂ］

①■歩□馬	②□馬□金	③□金□馬	④なし
⑤なし	⑥なし	⑦■歩□角	⑧□角□銀
⑨なし	⑩なし	⑪□銀□歩	⑫□歩□飛
⑬□飛□馬	⑭なし	⑮なし	⑯□王□銀
⑰□王□歩	⑱□歩□香	⑲□香□歩	

甲組の宇出津次郎が歩上がり、甲組が 10 点獲得となる。

さて、三郎は即受けに出た。同じく次郎は、馬がかかったことをいち早く伝えるために即受け。次郎の場合は、かかっていなくても太郎に伝えることが大事であったろう。一巡して複数の駒は歩しかないので、大きい角を打ってでた。点数の大きい駒を出しておけば、敵が上がっても小さい得点ですむであろうということである。四郎は同じく角で受けて金がないことを示す銀打ちにでた。こうして次郎がテンパイ。四郎はテンパイした次郎の大きい上がりがないようにと飛を打つ。太郎は、４枚目の馬を出し様子を伺う。次郎に王があれば切り上がりするのであるが。四郎は太郎がテンパイとるのを拒むため、切って三郎が１枚の銀を持っていることに賭けにでた。太郎は次郎が銀を２枚も持っているとは思えないので、とにかくきって歩を出す。こうなると「手指し」になり、三郎は小さく上げさせるのに、歩以外の香を打たざるをえなくなる。

＊このように、［実例Ａ］と［実例Ｂ］とでは、全く展開が異なる。「ごいた」は、このように同じ配駒であっても何十通りいやそれ以上にもなり、勝負の行方も打ち方次第でどちらにも転がるところが面白い。

2．はりま王に勝てた！

「はりま王」とは、味方同士が「王」を一枚ずつ持つことをいう。
香はうまく使えれば「ハッタリ」が利く！

打順	打ち手	配　駒
①-⑤-⑨-⑬-⑰	甲組：能登太郎	(角・角・金・馬・香・香・歩・歩)
②-⑥-⑩-⑭-⑱	乙組：石川三郎	(王・飛・金・銀・銀・香・歩・歩)
③-⑦-⑪-⑮-⑲	甲組：宇出津次郎	(飛・銀・銀・馬・香・歩・歩・歩)
④-⑧-⑫-⑯-⑳	乙組：能登四郎	(王・金・金・馬・馬・歩・歩・歩)

[実例C]

①■歩□香	②なし	③なし	④なし
⑤■歩□角	⑥□王□銀	⑦□銀□香	⑧なし
⑨なし	⑩なし	⑪■歩□歩	⑫□歩□金
⑬□金□角	⑭なし	⑮なし	⑯□王□金
⑰なし	⑱なし	⑲なし	⑳■歩□馬
㉑□馬□香			

甲組の太郎が香で上がり、甲組が 20 点獲得となる。

さて、普通王がない場合は、敵の王を早く使わせる意味から太郎は角を２度続けて打つのが妥当であろう。しかし、これも第１打の香の打ち方も、いかにも香を３枚持っているような自信ありげに打たれると、誰も中々最初の香を受けられないもの。そこに目をつけた打ち方だ。２巡目に角が出た段階で、三郎は２枚角と思うが時すでに遅しである。

また、２枚の角（飛）を持っていて最初から使わないのは、普通王を持っている時に使う手である。いざという時には王で切って角（飛）を出せばテンパイはとれるというもの。

3．「ごいた」にも定石はある

いろんな格言 (定石) が生まれてきている。
１枚歩はいらない。２枚歩は大事にしろ。掛かりものがあれば歩はいらない。
馬は伏せやすい。などなど、競技をしていくと沢山でてくる。

打順	打ち手	配　駒
①-⑤-⑨-⑬-⑰	甲組：能登太郎	(角・金・金・金・銀・銀・歩・歩)
②-⑥-⑩-⑭-⑱	乙組：石川三郎	(角・銀・馬・馬・香・歩・歩・歩)
③-⑦-⑪-⑮-⑲	甲組：宇出津次郎	(王・飛・銀・馬・香・香・歩・歩)
④-⑧-⑫-⑯-⑳	乙組：能登四郎	(王・飛・金・馬・香・歩・歩・歩)

[実例D]

①■歩□金	②なし	③なし	④□金□歩
⑤□歩□金	⑥なし	⑦なし	⑧なし
⑨■銀□金	⑩なし	⑪なし	⑫□王□歩
⑬なし	⑭なし	⑮□歩□飛	⑯□飛□歩
⑰なし	⑱なし	⑲□歩□香	⑳□香□馬

乙組の四郎が馬で上がり、乙組が 20 点獲得となる。

さて、２枚の歩は大事にしろの格言を守っていれば、大きく展開が変わっていたろうに！　太郎は、はじめに銀を伏せていたなら角上がりができていたのだ。とはいっても４人の配駒を知っていればこそ言えるのかもしれない。実践ではやはり歩を伏せるかもしれないだろう。

＊「１枚歩はいらない」というのは、自分が１枚歩であれば、残る三人が９枚持っていることになり、相棒は３枚程度はもっているであろうということで、歩攻めにも対処できるということからである。いらないということは、率先して伏せ駒にしてもよいということだ。

＊「掛かりものがあれば歩はいらない」とは、これは自分が王を持っている場合で切り上がりが前提で、テンパイをとるときに歩を手中に持つかどうかということである。相棒と掛かった駒があれば、相棒がまずは掛かった駒を打ってくるので、歩は必要でなくそれ以外の少しでも点数の高い駒を持てということである。

＊「馬は伏せやすい」とは、どうしても点数の低い駒を伏せがちになってしまうものである。その裏をかいて金銀を伏せ、馬待ちにする輩もいる。

4.「ごいた」は手が７割、８割！　手を持つのも実力のうち！

何度もやっていると、驚くほどの良い配駒を手にする時がある。
そんな時、ついつい色気が出て、こんな打ち方をしてしまう。

打順	打ち手	配　駒
①-⑤-⑨-⑬-⑰	甲組：能登太郎	（王・王・馬・馬・馬・香・歩・歩）
②-⑥-⑩-⑭-⑱	乙組：石川三郎	（飛・角・金・銀・馬・香・歩・歩）
③-⑦-⑪-⑮-⑲	甲組：宇出津次郎	（角・金・金・銀・香・歩・歩・歩）
④-⑧-⑫-⑯-⑳	乙組：能登四郎	（飛・金・銀・銀・香・歩・歩・歩）

［実例Ｅ］

①■歩□馬	②□馬□飛	③なし	④なし
⑤なし	⑥■歩□角	⑦□角□金	⑧□金□銀
⑨なし	⑩なし	⑪□銀□金	⑫なし
⑬なし	⑭□金□銀	⑮なし	⑯なし
⑰□王□馬	⑱なし	⑲なし	⑳なし
㉑■歩□馬	㉒なし	㉓なし	㉔なし
㉕■香□王			

甲組の太郎が王で上がり、甲組が 50 点獲得となる。

太郎は、相棒が馬を持っていることを期待して打ち出すが、即敵に受けられてしまう。４枚目の馬が出てしまったので、歩も香も持っている太郎はこの時点では上がりを確定している。後は、50 点になるか 100 点上がりになるかで、場の様子を見学といった状態。四郎が、歩を打ってこない限り 100 点上がりはない。結局上図のとおりの決着となった。

あわよくば 100 点上がりをもくろむ太郎である。

打順	打ち手	配　駒
①-⑤-⑨-⑬-⑰	甲組：能登太郎	（王・王・金・馬・香・香・香・歩）
②-⑥-⑩-⑭-⑱	乙組：石川三郎	（飛・金・銀・馬・馬・香・歩・歩）
③-⑦-⑪-⑮-⑲	甲組：宇出津次郎	（角・金・銀・馬・歩・歩・歩・歩）
④-⑧-⑫-⑯-⑳	乙組：能登四郎	（飛・角・金・銀・銀・歩・歩・歩）

［実例Ｆ］

①■馬□香	②なし	③なし	④なし
⑤■歩□香	⑥なし	⑦なし	⑧なし
⑨■金□香	⑩□香□飛	⑪なし	⑫□飛□歩
⑬なし	⑭なし	⑮□歩□金	⑯□金□歩
⑰なし	⑱なし	⑲□歩□銀	⑳□銀□歩
㉑なし	㉒なし	㉓□歩□角	㉔□角□銀

乙組の四郎が銀で上がり、乙組が 30 点獲得となる。

確実に少ない点数で上がることはできても、ついつい大きな点数をねらって、上のような打ち方をし、場合によっては勝ちをのがすこともでてくる。

太郎は、50 点上がりならいつでも上がれたのであるが、欲がでてご覧の結果となった。序盤戦の戦いであれば、こういった積極策もいいだろうが、得点状況を頭に入れながら戦うことを忘れてはいけない。

ところで、四郎の歩攻めに対して、次郎は３手目に歩で受けて歩を出せば次郎の 40 点上がりが見えたのだが。次郎も冷静に場の歩の数を読めば、こうした策も浮かんだろうに。

まだまだ実例を掲載したいところであるが、こうして解説していても解説者当人流の解説になってしまう気もする。客観的な解説を心がけるが、どうやらそうでもないらしい。能登町宇出津の大会会場へ足を運べば理解できよう。皆、自分の打ち方が最も正しいと思って興じている人が多いのに気付くであろう。

本当は、能登の人たちも奥深い打ち方の全てを理解しているのではないと思う。だからこそ､新しい感覚の持ち主との交流も大切な事だと思う｡能登では定石と言っていることが、果たしてそれでいいのだろうか。まだまだ奥深いものがあるようにも思える。どうぞ、みんなで一緒に、「ごいた」の奥の奥へ探索に行こうではないですか。

═ 第４章 ═

伝承娯楽「能登ごいた」保存会

１．保存会の誕生

もともと自分たちが興じられればそれでいい、という高齢者が多いなかで、保存会の設置に真剣に賛同する仲間が 32 人集まった。彼らが発起人となって平成 11 年５月 14 日、設立総会が開かれ、初代会長に干場三郎氏（故人）が推挙された。怒鳴り声や笑い声が飛び交う「ごいた」の場にあって、彼はどちらかというと物静かに「ごいた」を極める人であった。駒づくりにも優れた人で、「ごいた」の打ち方も理にかない、見ている人たちをも魅了することがよくあったことを覚えている。

さて、保存会が取り組む事業のなかで、大会の開催は会員に最も喜ばれ、初年度では年３つの大会の開催であったが、平成 19 年度には年６つの大会を主催・協力するまでになった。いつもは気心の知れた仲間うちで楽しんでいるのが、大会ともなると、初めて対戦する人とも出会うので、いつもどおりの打ち方だけでは勝てない場合もある。「変わった打ち方をする」と文句を言いながらも、「ああいう打ち方もあるのだな」と後で納得するなど、多くの人が集まれば、それなりの打ち方もあり、面白さも増していったのかもしれない。

また、初心者向けの普及書として「ごいた入門書」を取り急ぎ発行した。初版（平成 15 年７月）発行以来、今日までに多くの質問等があり、それらに応えるべく内容を充実する意味で、今回の改訂版の作成にいたったのである。

また、各方面からの要請に応えた「ごいた」出前講座や、児童を対象とした教室の開催。そして、会員の励みになるよう「ごいた」番付の発行など、多彩な事業を行っている。

２．保存会の活動

保存会は、会費や大会の参加費・寄付金等で次の事業を行っている。
平成 19 年度の例でいうならば、主な内容は次のとおりである。

- ● ３月：第２回「ごいた」名人戦大会の開催
- ● ５月：第７回伝承娯楽「ごいた」選手権大会の開催
- ● ７月：第９回「町民ごいた」大会の開催
- ● ９月：第６回能登町長杯争奪「ごいた」大会への協力
  ごいた保存会東京支部結成交流会（東京）の開催
- ● 11 月：第 10 回全日本「ごいた」大会への協力
- ● １月：新春「ごいた」大会への協力
  「ごいた」が能登町無形民俗文化財に指定される
- ● ３月：理事会。総会
- ◆「ごいた」認定証（ライセンス）の発行
- ◆「ごいた」普及各種事業
- ◆「ごいた」商標登録一年越しに叶う

３．「ごいた」番付の発行

「ごいた」の競技力及び大会参加意欲の向上を目的に、平成 13 年度から「ごいた」番付を発行している。勿論発行元は「ごいた」保存会である。

番付編成会議公認大会は、平成 12 年度の３大会から、今では下記の６大会が公認大会となっている。

- ○伝承娯楽「ごいた」選手権大会
- ○町民「ごいた」大会
- ○能登町長杯争奪「ごいた」大会
- ○全日本「ごいた」大会
- ○新春「ごいた」大会
- ○「ごいた」名人戦大会

これら公認大会に参加することで、番付の十両の位置に顔を出すことになり、予選 16 位以内に入ると、幕内に入ることができる。以降、大会の成績を元に大会終了後直ちに開かれる、番付編成会議で新番付が発表される。

横綱になるのは容易ではなく、三役の位置で２場所連続して優勝するか、同等の成績を収めなければならない。また、横綱は３場所連続して予選落ちだと、陥落することになっているなど、番付上位を堅持していくには、それなりの実力が求められる。現在までに４人の横綱が誕生しており、２人は今なお横綱を張っており２人は陥落した。とはいえ、三役を維持している。さすがに安定した力を発揮しているものである。こうしたこともあり愛好者は日頃から腕をみがいている。ちなみに、平成 20 年５月場所を終わっての番付には、「中入り」が 62 人、「十両」が 19 人名前を連ねている。

この番付の登場は、「ごいた」愛好者にとって良い励みになっていることは、言うに及ばない事実である。

ごいた番付（木製）
（平成 20 年 5 月現在）

═ 第５章 ═

これからの「ごいた」

１．仲間の輪を広めよう

「ごいた」は、珍しさも手伝ってか、近年マスコミに登場することが多くなってきた。そのせいか、「ごいた」を教えてほしい、「ごいた」の駒がほしいという声も聞くようになってきた。

しかし、「ごいた」は、やっていくほどに奥深さがでてくるもので、おおよその遊び方は理解できても、楽しみ方までは一長一短に理解できるものでもない。４人そろわないと競技できないということもあって、他の地域で普及していくことには、相当の難しさがあると思われる。

ところが、平成 18 年 11 月からインターネットによる大きな進展が見られた。とあるウェブサイトで立ち上げた「ごいた」のコミュニティースペースに、各地から仲間が参加し、ネット上で情報交換を行っている。ここでの各地の人との出会いが、「ごいた」のカード商品を生み出している。このことは、日本のみならず海外への普及も示唆しており、「ごいた」保存会がこれから果たしていく役割は大きいと思われる。

そんな中、「ごいた」保存会東京支部が、平成 19 年９月 26 日に発足した。「ごいた」は、教える側にも覚えようとする側にも、熱意があってはじめて普及するものであると思う。そんな点、ボードゲームの愛好者は飲み込みが早かった。

また、東京で「ごいた」ゲームを楽しむ人たちと交流して、女性がいるのに驚いた。能登では女性が「ごいた」をしている場面に出くわしたことがなかったからである。ゲームであればこそ女性がいても何の不思議もない。今更にして気付いたのである。本家も学ぶことが色々ある。今回の改訂版の発行においてもそうである。解説の内容で、初歩的な説明が足りないことに気付いたのもそうであった。

「ごいた」発祥の地、能登町宇出津に、保存会の目標の一つである「ごいた道場」を設立することも重要であるが、多くの人たちに「ごいた」をわかりやすく理解してもらうよう努めていくのも大切なことである。地元でも若い世代に「ごいた」が受け入れられるよう、さらなる活動を進めていくが、今回の「ごいた入門」（改訂版）の発行が、少しでもいろんな人に役に立てば幸いと願っている。

2．世界へ羽ばたく「ごいた」

平成 19 年春、「ごいた」カードが誕生した。「ごいた」の面白さを世界の人にも教えたいという思いから製作されたのであった。竹製の駒がカードに代わっただけで、ルールは勿論、能登での呼称をそのまま使っている。パッケージには能登半島を、カードの裏面には石川県を図示するなど、本家でやっている感覚で、そのまま楽しめる工夫を凝らしている点が嬉しい。

カード製作者のメンバーは、昨年 10 月、世界最大のボードゲーム祭りであるドイツのエッセンで開催された「シュピール ‘0 7（15 万人）」に、11 月には、オーストリアでの「シュピーレフェスタ（7 万人）」、そして本年 5 月韓国のソウルでの「ボードゲーム・コン 2008」にも参加し、カードをもって「ごいた」の普及を図っている。

カードは、文字面の表記が和文と英文表記となっており、漢字に比べて英文が小さいこともあり、なかなかその面白さが伝わらず苦労したそうだ。それでもドイツでは 30 個のカード「ごいた」が売れたという。一方、韓国では漢字の文化があるので、たいへん友好的に受け入れられたそうだ。

国内でも、全国各地に少しずつ愛好者が増えつつあるが、これが今、世界へも広がりをみせようとしている状況に、本家たる自覚を新たにするものである。

世界最大のボードゲームの祭典
「シュピール '07」＝ドイツ＝

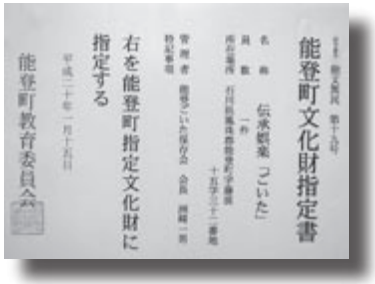
「ごいた」カードで世界の「GOITA」に

3．公認された「ごいた」

「ごいた」保存会東京支部が設立し、その仲間からカード版の「ごいた」も開発され、大きく全国あるいは世界へ展開されようとする状況をみて、「ごいた」＝「能登で生まれた娯楽」なることを、だれもが知るところとはいえ、この際今一度発祥の地を、はっきりとした形で記録に留めておく手段として商標登録の申請をしたのであった。こういったたぐいの登録申請は、仲介する弁理士泣かせのものであったと聞いたが、めでたく受け入れられたのである。

商標登録証

その道の分類でいくと、第 28 類「おもちゃ」、第 41 類「技芸・スポーツ又は知識の教授、セミナーの企画・運営又は開催、図書及び記録の供覧、おもちゃの貸与」という 2 つの区分で、平成 20 年 3 月に商標原簿に登録されたのである。



町文化財指定書

一方、保存会員の口から、先人が培ってきたこの文化を、町の文化財にする値が充分にあるのではないか。という意見を受け、平成 18 年秋に町教育委員会へ指定の申請を行った。ところが、ここでもまた、こういった分野における文化財への指定は全国的にも類がないとの見解であったが、文化財保護審議会の委員自身「ごいた」というものを理解していないということから、継続審議として調査をしていくこととなった。こうして 1 年余りかけ、審議会の委員が大会会場を訪れるなど調査を経て、平成 20 年 1 月 15 日、能登町指定無形民俗文化財に指定されたのであった。

平成 11 年に保存会が結成された時、いったいだれがここまでを想像しただろうか。地元の普及・継承活動に地道に取り組んできたことが、今地元のみならず、各地のボードゲーマーたちにも受け入れられ、純粋に人々に愛される娯楽であることが証明されてきた。しかし、これに甘んじることなく更なる普及継承に努めていく覚悟である。

『ごいた入門』（改訂版）

平成 15 年 7 月 19 日　第 1 刷発行
平成 20 年 7 月 1 日　　改訂版発行
発　行　伝承娯楽「能登ごいた」保存会
〒 927-0433
石川県鳳珠郡能登町宇出津レ字 9 番 1 地
能登町立宇出津公民館内　℡ 0768-62-3458
編　集　「ごいた入門」編集委員会